

月曜礼拝(2016/1/25,中原担当)

『神の愛の優しさと厳しさ』

聖書：ヨハネ福音書 3:16,ヨハネ福音書 2 章 13-16 節

讃美歌：讃美歌 2 編 182 番（丘の上に）

1,キリスト教のルーツ

今年度最後の月曜礼拝ですね。この世の中には色々な宗教がありますが、その中で歴史においてもその広がりにおいても世界最大級の宗教であるキリスト教の神様とはどんな方なのかという話から始めましょう。そしてその神様のもつ優しさと厳しさに触れたいと思います。

人類の歴史は大きく 2 つに区分されますね。つまり、紀元前と紀元後です。世界史などで、B.C と A.D. という記号になるのはご存知ですね。それは Before Christ という英語の頭文字とラテン語の Anno Domini（主の年という意味）という頭文字からなりたっています。今年、A.D.2016 年、つまりキリスト誕生後 2016 年目という意味であり、これはほぼ世界共通の年号となっています。アメリカ、イギリスはもちろん、中国でもロシアでも使われています。ただ、わが国では元号を使いますが、それは日本以外では通用しないので、国際化時代に相応しいのは「国際暦」とよばれる西暦であり、皆さんにもなるべくこれを使うことをお勧めします。

さて、聖書に戻ると、旧約聖書は紀元前、つまり B.C の頃の出来事を記しています。当時の神は、エホバ、またはヤーウエと呼ばれたり、単に主（アドナイ）と呼ぶことも多かったそうです。旧約聖書の時代は、ユダヤ教の世界ですが、その歴史をさかのぼると「信仰の父」と呼ばれたアブラハムに行き着きます。そのアブラハムは、イスラム教のコーランでも「イブラヒーム」という名で出てきますが、そのアブラハムのユダヤ教からイスラム教が枝分かれしたといわれています。そのユダヤ教とキリスト教の関係は、「ユダヤ教の中で起きた宗教改革によってキリスト教が生まれた」とか「基督教は二段式ロケットの構造」(大澤真幸・京大教授)とか言われるわけです。

2,キリスト教の神は「三位一体」

キリスト教は、3つの柱から成り立っていて、三位一体という言葉で表されます。英語では、**Holy Trinity** といいます。その3つとは、頂点に天の神、その下に神の一人子としてこの世に送られたイエス・キリスト、そしてキリスト亡き後は、聖霊 **Holy Spirit** が働き、全世界に神様の息が、風のように吹き渡ると考えられて信徒達は、これによって生かされると信じています。讃美歌の中にもありますが、「3つにいまして一つなる神」というのがキリスト教です。

さて、旧約聖書の時代からイエスの時代、そして現代に至るまで、天の神様は愛の根源として2つの性質を持っていました。一方では、優しさ、もう一方では厳しさ、その両方を鮮やかに示すイエスのお顔をここに掲げます。一方は、韓国の画家で、大学の先生でもある **Oh Hae-Chang** さんの **The Smiling Christ** という作品で、とても愉快的な姿のキリスト像です。もう一方は、イエスの厳しい表情の作品で、英語で **The Angry Christ**,つまり「怒れるキリスト」という題がついていますが、フィリピンのネグロス島出身の **Lino Pontembon** さんの絵です。

チャンさんの絵のようなやさしいキリストのお顔はよく見られると思いますが、厳しい表情はまれだと思われます。

次にその絵を念頭に置きながら、聖書の中から神の優しさと厳しさを示す部分にふれます。

3,「優しさ」の物語

まず旧約聖書の詩編 30 篇では、神に救いを求めるもの達へ神は助けと癒しを与えたことが記されていますし、私の好きな詩編 23 編では「たとえ死の陰の谷を行く時も私は災いを畏れない。あなたが私とともにいて下さるから」とあり、これで勇気を与えられた人が地球上に無数にいるはずです。新約聖書では、キリストが生まれつきの盲人の目を見えるようにしたり、病人を癒したり、多くの良き業が記されていますが、今日の聖書の箇所にもどってみますと、ヨハネ福音書 3 章 16 節はこう書かれています。「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅び

ないで、永遠の命を得るためである」と。人間には 80 歳とか、90 歳とか寿命があります。それが尽きたとき死によって、万事休すとなるのが、この世の普通の理解です。しかし聖書では、キリストを信じた人はすべて、死によって一生が終わるのではなく、永遠に続く命が与えられるという約束がなされています。これこそ神様からの大きなプレゼントであり、神の究極の優しさのメッセージです。

4. 「厳しさ」の物語

イエスの優しさとは正反対の「厳しさ」にも目を向けてみます。それは今日の聖書の箇所（ヨハネ 2 章 13-16 節）ですが、神殿の境内でお金の両替や牛や羊や鳩などを売る商売をしていた商人達に対して、イエスは縄で作った鞭で、羊や牛を追い出しただけでなく、彼らのお金をまき散らし、台もひっくり返してこういわれた。「私の父の家を商売の家としてはならない」と。この箇所を読むと、イエスのイメージががらりと厳しいものに変わります。どうしてこんな激しい態度をイエスが取ったのか、スコットランドのグラスゴー大学のバークレー教授の解説によると、方々からやって来た巡礼者に対して、商売人達があくどい搾取をしており、祈りの家が盗人の家にされてしまったことへの怒りだったと述べています。人間の目からも、神の目からも許されない不正があったので、そこに正義、公正を取り戻すために、厳しい態度が取られたと思われれます。柔和なイエスが不正に対して厳しく怒った、というめずらしい記事です。

5. 今日の状態にイエスはどう反応されるか？

日本全体そして沖縄も、いま多くの問題に直面しています。人間の法、**secular law** に照らしても、また神の法 **divine law** に照らしても、とても許されないはずの状況があります。

世俗の法の中で最高法は、何と言っても「憲法」です。その憲法に基づいて国の組織や活動が規律され、これに反する政治や行政は許されないのが、立憲国家の基本原則です。これが崩れる時、どんな国家もブレーキの利かない自動車のように、危険な暴走が始まります。かつてヒットラーのナチスや、戦前戦中の日本がその状態

した。いま、この国では、多くの憲法学者や国民の反対の声にも拘らず、憲法にさからって軍備を強化する政治の動きが再び始まっています。かつてアメリカやイギリスを鬼畜生に見立てて戦争を進めた歴史をなぞるかのように、今度は政治主導で中国などを仮想敵国として国民をマインドコントロールする動きが始まっています。国連の元難民高等弁務官の緒方貞子氏は、中国の脅威をことさらあおる現状に対して、こう批判しています。「日本はアジアの一員であり、中国とは長い交流の歴史がある。中国との関係を度外視して日本の外交は語れない。日本が中国と対立することは、アメリカも世界も望んでいない」と（琉球新報、16/1/13）。

目を地方に転じますと、沖縄に住む私たちにとって辺野古問題が深刻です。子や孫のため平和の世を守るという一念で非暴力で抵抗し、抗議する市民達に対し、屈強な海上保安官や警視庁の機動隊が容赦なく排除し、逮捕する有様は、旧日本軍の DNA を感じさせます。県内のいくつかの選挙でノーという民意が表明され、また 100 人以上の海外の学者有識者達が反対声明を出すという異例の事態のなかで、強行されています。辺野古を強行したら、沖縄の米軍基地問題にとって時限爆弾になる、という警告をしたのは、知日派の政治学者として有名なコロンビア大学の G・カーチス教授でした（朝日、15/12/15）。

この現状にイエスは何といわれるのでしょうか。神の国の法は、聖書から出て来ます。2つの聖書の言葉を紹介します。一つは旧約聖書の詩編 85 編 10 節以下です。こう書かれています。「主を畏れる人に救いは近く、栄光は私たちの地に止まるでしょう。慈しみとまことは出会い、正義と平和は口づけし、まことは地から萌えいで、正義は天から注がれます」。神を恐れない国に未来はないといえるでしょう。新約聖書のマタイ福音書 26 章 52 節にあるイエスの言葉は、もっとストレートであり、こうなっています。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びる」。この国の現状は、世俗の法、*secular law* でも、神の法、*divine law* でも否定されるべきものです。恐らく、イエスのあの厳しい怒りの指先は、この状況にも向けられているように私は感じます。

6.18 歳選挙権への期待と希望

さて皆さんにも関係することですが、今まで 20 歳で与えられていた選挙権が今年から 18 歳に引き下げられました。その結果ここにいる全員が有権者であるはずですが、いま、高校生に有権者となるための教育をどう進めるか、政府でもマスコミでも議論がなされています。この国ではかねてより教育への国家的統制が強く働き、民主主義、自由主義国家のあるべき状態からは離れ過ぎています。学習指導要領や国定に近い検定教科書による教育、そして国旗国歌の強制など、憲法で保障されているはずの自由や権利が学校内ではなきに等しい状況です。今後、すべての政党や政策に関する、自由でタブーのない学びを保障する必要があります。1960 年代のアメリカの高校で、ベトナム戦争反対の意思表示として黒い腕章をつけた高校生たちが、学校側から処分された事件があり、裁判になりました。連邦最高裁では、フォータス裁判官 (Justice A. Fortas) が判決文を書きましたが、こう言っています。「高校生たちの行為は言論と同じだから処罰は許されない」、と。更にこうも述べました。「生徒であれ、教師であれ、一步校門を入ったら、とたんに言論や表現の自由という憲法上の権利がはぎとられるという議論は成り立たない」と。同じ自由主義の国でありながら、雲泥の差を感じさせる事件でした。この国の将来を決めるカギは、皆さんの手中にあることをしっかり覚えて下さい。

では、祈ります。

「天の神様、今朝はこうして今年度最後の月曜礼拝の時を与えられ感謝します。どうかすべての学生、教職員のみなさんがあなたによって、支えられ、導かれつつ、クリスチャンスピリットに立つこの学院の発展のために貢献することができるようにして下さい。主イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。」